

王立国境警備隊 一黒い来
訪者一

葵

蠢く者達

砦の城壁のふもとで何かが動いた気がして、見張りに立っていた兵士の一人は目を細めた。

だが、夜の深い闇の中では確信にいたるようなものは見えなかった。

気のせいかな...？

そう思いながらもどこか胸騒ぎがして、仲間に声をかけてから一人城壁の階段を下った。

松明を片手に通用門のかんぬきを外して外に出ようと門を開けた刹那、兵士は声を上げるまもなく音も無くなだれ込んできた黒い物体に飲み込まれた。

石畳の上、松明の明かりと地をうごめく黒い塊だけが揺れていた。

東の国境

暇をもてあました様子で黒髪青年は城壁の上から下を眺めながら大きな欠伸をした。

その服装は軽装とはいえ兵士の装いでこの城壁の警備に当たっている兵士の一人であると容易に察しがついた。

たまたま近くを通りかかったと思いきろブを着た兵士が眉をしかめはしたが、特にとがめる事もなく彼の後ろを通過していった。

ここはエラルド山脈の懐に抱かれた小国ルーティン、その北東の国境の町ラサ。

この城壁に囲まれた小要塞のような小さな町の東の城門から出た先は隣国カタルニアの土地となる。

「ジュニア。こっち戻ってくる時水一本持ってきてくれや」

先程大欠伸をした兵士が下に叫ぶが、下の道を行きかう人々の中に答える者は居ない。

「おーい、ジュニア」

再び声を張り上げると、今度は下を歩いていた兵士の一人が足を止めた。

「ジュニアって呼ぶなっつってるだろ！！！」

振り返って不機嫌にそう叫んだ兵士は、少年と言っても差し支えないまだ幼さの残る風貌をしていた。

その言葉を持って頼みごとを了承してもらったと解釈したのか、城壁の上の兵士はもう背を向けていた。

「怒ってやんの」

きしし、と人の悪い笑みを漏らしながら城壁の上の兵士は空を仰ぐ。

ルーティンは大国フィラウダの北に位置する小国だ。

この同じ空の下、はるか南に下ったフィラウダとバルスラ帝国の国境は、今戦乱に陥っている。

ここは戦乱とは無関係だと言うように、ラサの街はのどかだった。

近づいてきた足音に黒髪の兵士が顔を上げると顔面に水の入ったボトルが投げつけられた。

「っ！！」

避けようもなくボトルは黒髪の兵士の額に当たって地面に落ちた。

「注意力散漫」

そう言って、先程ジュニアと呼ばれた少年兵はニヤリと笑った。

「可愛くねえなあ、ジュニアの癖に」

「ジュニアじゃねえ、ジュニアスだ」

これはジュニアスが入隊して以来、何度となく交わしてきたお決まりの会話だ。

「未成年はジュニアで十分」

その言葉にジュニアスはまだ幼さの残る顔に不機嫌の色を浮かべた。

ルーティンにおいて成人は18歳、ジュニアスはまだ17歳だった。

16歳でジュニアスが入隊してきた時既に18歳だったこの黒髪の先輩兵士は、何かにつけてジュニアスを子ども扱いする。

「イヴァンだって大してかわんねえじゃん」

イヴァンは勝ち誇ったようにニヤリと笑う。

ちなみにイヴァンは愛称で名はイヴァインだ。

「俺は酒が飲める、お前は飲めえね。大人になってから言いな」

どうせあと数ヶ月もすれば18になる、今に見てろ、とジュニアスが不機嫌に顔をそらすとそんな二人を呆れた様子で赤毛の兵士が見ていた。

「お前らよく飽きないな」

そのやり取り、聞いているほうが聞き飽きてるぜ？と呆れ声で言って、遠眼鏡を片手に顎でルータインの内地の方を指した。

「午後は大仕事になりそうぞ」

内地に続く道の上にわずかな砂煙が目に入る。

イヴァインは赤毛の兵士から無言で遠眼鏡を奪って覗き込む。

「ゲ」

嫌そうな声と表情で赤毛の兵士を振り返る。

「何アレ、引越し？」

「さあな」

赤毛の兵士は肩をすくめる。

「ディーン、イヴァイン」

呼ばれて三人は振り返る。

正しくはジュニアスは呼ばれていないのだが、声の主に背を向けているわけにはいかなかったのだろう。

そこに立っているのは金髪を短く切りそろえた兵士、細身の三人とは明らかに違う体躯と右目に当てられた眼帯が彼が戦地に赴いた事のある兵士である事を示していた。

「ここの見張りは俺とジュニアスでやる、お前達は下に降りろ」

「りょーかい」

「はいよ」

相変わらず締まらない返事をしてディーンとイヴァインは城壁を下った。

城壁を降りたディーンとイヴァインは隊長であるイングベルトの姿を見つけて歩み寄った。

「お、来たな」

二人を認めてイングベルトは口元に笑みを浮かべた。

イングベルトの傍らにはローブを着た宮廷魔道師であるヴィリーの姿もあった。

北東国境警備隊第4隊は隊長イングベルトを筆頭に副隊長トビアス、宮廷魔術師ヴィリー、そしてディーン、イヴァイン、ジュニアス以上の6人で編成されている。

「お前ら、暇なんだろう？どうせ午後からは俺らの仕事になるんだ、一足先に検品に行け」

検品という言葉に二人とも顔をしかめた。

検品という仕事は、国境を通過して出て行く品に不正なものが無いかを確かめる作業だ。

はっきり言ってディーンもイヴァインも嫌いな仕事だった。

「えー...俺らそんなに暇ってワケじゃ...」

ないっすよ、と言おうとディーンが口を開いた所にヴィリーが小さく笑う。

「大欠伸してたくせに何言ってる」

「というわけだ。ロルフの隊が当たってるから手伝って来い」

苦虫を噛み潰した顔でディーンとイヴァインは顔を見合わせた。

検品所にやってきたディーンとイヴァインだったが、壁の陰に隠れてこそこそと話をしていた。

「...お前、どう思うよ？」

チラリと目配せしてきたディーンにイヴァインは聞くまでも無いだろう？と嫌そうな表情だけを返した。

二人がそっと覗き込んでいた検品所、そこにはうず高く石のようなものが積み上げられていた。

第3隊の隊員であるハワードとジユドがそれをひたすら右の箱から左の箱へと移していた。

その表情には既に疲れが見えている。

「ありゃ何だ？石？」

「あれは化石だ」

「へえ、化石ねえ」

「...」

イヴァインの問いに間髪入れずに帰って来た答えにイヴァインもディーンも感心して頷いて、二人で顔をしかめた。

二人が隠れている壁にヴィリーが寄りかかっていた。

壁に隠れてサボっている事がばれた二人を半眼で見やっ、ヴィリーは上を指した。

「丸見えだ」

ヴィリーの指を追った先では、「よ！」とでも言うようにイングベルトが片手を上げた。

「すんげー暇そうじゃん、上！！」

思わず隊長を指差してヴィリーに食って掛ると、特に気にした様子も無く淡々と答えた。

「だから6人も要らない。4人で十分だ。

ロルフにはお前達が行くと伝えてある」

サボるなよ、と釘を刺してヴィリーは姿を消した。